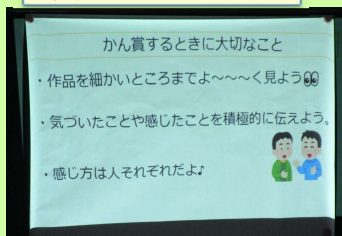


導入の工夫・児童が積極的に感じたことを伝え合えるように、スライドを使って鑑賞のポイントを示した。
・本時で扱う絵を、最初は一部分だけ見せ、どんな絵を見るのか想像させた。
→児童の興味を惹きつけた上で、授業を始めることができた。

鑑賞のポイントの提示



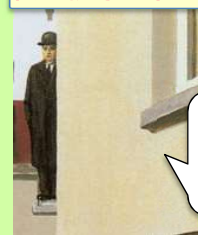
椅子のみの鑑賞・ICTの活用



伝え合いの様子

プロジェクターを使って
一斉で鑑賞
→児童が気付いたことを、
指し示しながら行うこと
で、1人の意見を全員で
共有でき、対話がしやす
くなった。

絵の提示の仕方の工夫



最初は、絵を拡
大し、一部分だけ
を見せた。

いきなり人が空から落ちてきて、時が止まり
ました。その時によく顔を見てみると、全員同
じ顔でした。そして時がもどって雨のように砕
けてしまいました。でもそのことは夢でし
た...

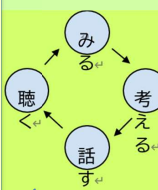
児童が考えた物語

《授業を行って》

・座席の工夫として、椅子のみで一斉鑑賞を行った。発言できる
児童には偏りはあった一方で、児童の振り返りから、近くの友
達とは絵について感じたことを話すことができた、という児童
も多くいた。発言できなくても、絵を見てよく考えている児童
をどう活かすかが課題である。また、近くから見たときと、遠く
から見たときでは見え方が変わってくるため、まずは絵をじっ
くり近くで見る時間が必要であると感じた。
・絵からかけ離れた想像をしてしまう児童がいたため、絵のよさ
や表現の特徴などをよく読み取った上で、物語を書かせる活動
に入るのがよいのではないかと感じた。また、物語を書くとき
に、スクールタクトなどで一人一人に画像を共有し、絵のどこか
らそう感じたのか根拠をもって考えられるようにするのも一つ
の方法である。

実践事例3 所沢市立柳瀬小学校 鈴木 遥香 題材名 龍を見る【鑑賞】(第6学年)

ドラゴンブリッジ(ブロンズ)



作品を見て、見方や感じ方を深めよう

作品を見て気づいたことや考えたことを根拠を
もとに伝え合う。友達と自分の考えを比べ、見方・感
じ方を深める。

- 1 みる
意識をもってじっくりと隅々まで観察する。
 - 2 考える
作品のどの部分を見てそう思ったのか、「根
拠」を探すこと。作品の中に具体的な根拠を
求めることによって論理的思考が促される。
 - 3 話す
自分の考えたことを的確な言葉にして伝え
る。
 - 4 聴く
新たな視点を得て、改めて作品を「みる」と、
それまでみていなかったものがみえてく
ることがある。
- この4つを繰り返し、考えや視点をみんなで共
有しながら、鑑賞を深めていく。

導入の工夫 プロジェクターで鑑賞する作品を見やすく提示し意欲を高めるとともに、
スクールタクトで細かいところまで見えるようにした。

ICTの活用



スクールタ
クトで作品
を見ながら
自分の考え
を打ち込ん
でいる様
子。

話し合いは、プロジェクターで映した作品
を見ながら行った。
→全員で同じ物を見ることで、友達の話
を考えながら聞くことができた。



1つの画面を見
ながら考えを
共有し、自分の
考えを深めて
いる様子。

鑑賞した児童の言葉

目の部分が困っている感じになって
いる。手の指は三本。尻尾は悪魔？
座っているのに、羽を開いているから、
飛ぶのか？降りてきてすぐの様子？

振り返り

みんなの意見を聞いて、守り神とい
う意見が変わった。特に「羽の部分を広
げている」「口元が威嚇しているように
見える」などを聞いて、守り神だと思っ
た。木のほうに街があって、守り神が街
に不幸が来ないように守っていると思
った。

《授業を行って》

- ・作品を手元で細部まで確認できるスクールタクトと、全体で
考えを共有できるプロジェクターのそれぞれのよさを活かす
ことができた。ICTは用途に応じて単体ではなく複数のよい
ところを組み合わせることでより効果的に利用することがで
きると感じた。
- ・作品をじっくり見る時間を取ったので一人一人が自分なりの
意味や価値をつくりだすことができた。また、一度文章に表
すことで自分の考えを整理することができた。
- ・「どこからそう思うか」を意図的に発問し、根拠を意識するこ
とで、イメージが飛躍することなく話し合うことができた。

児童の変容 成果と課題

☆成果 ICTの活用

- ・ICTの活用により、普段発表や自分の意見を述
べることを苦手とする児童でも、自分の考えを入
力することが増え、表現方法が多様化した。児童
間の伝達手段も多様化したことにより、伝え合い、
学び合いが活発に行えるようになった。
- ・児童が考えたことをさらに「どこからそう思うか」
と問いつけることで、自分がそう思った根拠を作
品の中に探すことに意識を向けることができた。

☆課題 ICTの活用

- ・ICTをいかに効果的に活用するか。操作や入力
に時間を取られると、本来の学習活動の時間が
不足する。中学年、低学年では顕著に現れる。個
人差も大きい。
- ・プロジェクター等のICT機器は、全体で共有す
るのに役立つが、めあてや約束など児童に意識
させたいところは板書し、残しておくようにする
必要がある。

☆成果 導入の工夫

- ・鑑賞に抵抗なく取り組むことのできる児童や
鑑賞の時間を楽しみにする児童が増えた。
- ・さまざまな導入の工夫により、児童が学習への
見通しをもつことができるようになり、主体的
に学習に取り組む児童が増えた。

児童の意欲を高める →学びの多様化

☆課題 導入の工夫

- ・児童の製作時間を確保するため、児童の意欲を
高めるための導入の時間のさらなる短縮。短時
間に児童が「やってみたい。」「表してみたい。」
という意欲をもてるように、必要な説明も含めて有
効的な導入の手段を題材によって検討していく必
要性をさらに実感した。

ICTの活用、導入の工夫を さらに検討する必要性

参考文献等

- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説図画工作科編 文部科学省
- ・「教えない授業」～美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方～
鈴木有紀 英治出版

授業実践研究

道徳科 授業実践研究部

研究主題

主体的・対話的で深い学びを実現するための活用する I C T

～誰もが考えたくなる道徳科の授業づくり～

並木小学校

八谷 絢香（リーダー）

松井小学校

栗原夕里奈

牛沼小学校

楯 菜都子

泉小学校

野崎 圭

宮前小学校

鈴木 直美

中央中学校

田中 千尋

安松中学校

篠原 弘徳

担当指導主事

鈴木 進也

14

考えたくなる展開前段

考えたくなる展開前段（道徳的諸価値の理解の段階）のポイント

考えの見える化

生徒が直感的な操作！

自分の考えを
見える形で
表現できます。

画面をタッチして直感的な操作で、自分の気持ちを表現できます！

考えの共有

Jamboard
付箋に考えを貼り付けて、共有することができます。

スクールタクト
協同学習モードでお互いの考えを見ることができます。

考えたくなる展開後段

考えたくなる展開後段（自己を見つめる段階）のポイント

授業前と後の比較

◎**スクールタクト**で色別比較！
シートの色で自分の意見の変化がわかります。

◎**Google Forms** で事前事後比較
事前にフォームでアンケートをとると、後段で意見をくらべるのに便利です。

自己の振り返りをさせやすく！

◎**振り返りが苦手な児童に！**
『道徳ノート書き方シート』を黒板に貼ったり、スクールタクトのページに張り付けたりすると効果的です。

道徳ノート書き方
わたし(ぼく)は、今日の学習で○○さんの話を聞いて
が分かりました。と思いました。
★わけは～ だからです。
★前は、～と思っていたけれど、今は～

考えたくなる終末

考えたくなる終末のポイント

ねらいとの一貫性

本時のねらいを、最後まで意識することが重要です。
説話やゲストティーチャーの話では特に、一貫性をもたせるための言葉の吟味や、GTとの綿密な打ち合わせが大切です。

価値を押し付けずに余韻を残す

話しすぎると、最後に押し付けて終わってしまうことも・・・
格言、詩、歌の歌詞、漫画の1コマ、熟語などを紹介して終わるのもおすすめです。

レシピを活用した効果

先生方からの **声** をいただきました！

◎「授業づくりレシピ」で、授業に活用できる部分はありましたか。

授業実践やヒントが簡単に得られるところが、**教材研究の時間を減らせる**！

即活用できる、**具体的な指導法や、教材の場面例**が提示されていて便利！

あまり活用してこなかった教員の提案があったので、**チャレンジしてみたい**！

なんと！
「活用できる」の声が **100%**

●活用できない ●活用できる

◎今後「授業づくりレシピ」を活用していきたいですか。

●学期に1回 ●月に1回 ●毎回の授業で

展開に困ったり発問に悩んだりすることが多いので、ありがたいです！

悩み別に項目があったので、その時々のごとに合わせて、利用したい！

さらに様々な提案があり、選択肢が増えると使いやすくなっていいですね。

成果と課題

成果

- 授業の組み立て方（ねらいから逆算する、焦点化して考える等）を部員全体で共有することで、日々の授業でも自信を持って行うことができるようになった。
- 様々なアイデアを共有することでやってみたいと思う授業の引き出しが増えた。
- ICT をただ使うのではなく、全員がなぜ使うのかを指導案に落とし込み、効果的な活用の方法を考えることができた。
- 2年目からは小中学校の先生がそれぞれの発達段階を踏まえながら協議を重ねたことで、小学校1年生から中学校3年生まで系統性を考えることができた。
- どんな時にどんな手段があるか協議し、実践してきたことを「道徳授業づくりレシピ」に反映させることができた。

課題

- 研修の成果である「道徳授業づくりレシピ」を所沢市内の先生方に広く知ってもらうために、周知方法を考える。
- ICTによって意見の共有や分類まではできるが多かったが、そこから話合いに繋げるための手段としていく必要がある。
- 研修の最初と最後に児童の変容を見取れるようなアンケートを実施すればよかった。

教育相談研究

教育相談 研究部

研究主題

児童生徒の生き抜く力を9年間通して育む
手法の研究

並木小学校	上野 恭子（リーダー）
南小学校	阿部 友子
北秋津小学校	柳田 裕子
北小学校	加藤 優子
南陵中学校	長戸あかね
安松中学校	大島 邦子
小手指中学校	新井 朱夏
上山口中学校	平山 雄一

担当指導主事

和田 里恵 岡田 香代

「教育相談研究員の研究によせて」

早稲田大学・教授・嶋田洋徳

2022（令和4）年12月に生徒指導提要（改訂版）が公表されたことは、記憶に新しいところかと思います。大学や大学院でも、既に改訂内容を踏まえた授業を行っています。改訂提要では、今期の教育相談研究員の先生方が主要テーマとして掲げた「ストレスマネジメント」にも、もちろん言及されています。具体的には、自殺予防教育、非行防止教育、いじめの未然防止教育（特に加害児童生徒）、学校危機への介入、暴力行為の未然防止教育、喫煙・飲酒・薬物乱用防止に関する未然防止教育、性的被害者の心身のケア、統合失調症への支援など、児童生徒の多岐に渡る問題に資すると位置づけられています。

2016（平成28）年の自殺対策基本法の改正において、学校に心の健康保持に関する教育や啓発を行う努力義務が課せられていることは、周知の事実であると思います。それに加えて、2022（令和4）年10月に自殺総合対策大綱も改廃され、直面する可能性のある様々な困難やストレスへの対処方法（コーピング）を身につけるための教育、特にSOSの出し方に関する「定期的な」教育等の推進が求められ、各学校が自殺予防教育に取り組むことが努力義務として課せられました。このような社会情勢の中、所沢市は小中学校の現場レベルでこのような課題に取り組んでおり、非常に先駆的な活動が行われていることになると思います（いじめ防止対策推進法に基づいて策定された「学校いじめ防止基本方針」でも、所沢市のほぼすべての小中学校がストレスマネジメントを行うことを既に公表しているのはご存知の通りです）。特に、義務教育9年間を見通してストレスマネジメントに取り組むという素晴らしい考え方は、全国的にみてもそれほど例がないと思います。

従来の「心理教育」は、取り組みたい先生だけが取り組んでいたりと、ある意味のお楽しみ会的な様相が多分に含まれていたり、あくまでも教科課程外の補足とされてきた側面があったように思います。しかしながら、今回の改訂提要においては、心の危機理解について、中学校保健体育科「欲求やストレスへの対処と心の健康」、小学校体育科保健領域の「心の健康」あるいは「総合的な学習の時間」等において実施すること、さらには保健体育科の教員や学級担任と養護教諭やSC、SSW等が協働で授業づくりを行う必要があることにも言及されています。すなわち、ストレスマネジメント教育は、関連法令を根拠にして、学校が主軸にすえて取り組むべき義務がある教育内容に既になっているとも言えます。（参考までに、私が理事長を務める日本ストレスマネジメント学会では、教科課程の正規時間数を増やすように文部科学省に様々な形で働きかけています。）

今期の教育相談研究員の先生方は、コロナ禍で普段の教育方法にも大きな変化が求められる中、精力的に取り組んでおられたように思います。思いだけが先行する単なる実践活動にとどまらず、エビデンスのある知見に基づき、学術的にも担保された内容に仕上がっています。人一倍辛い経験をした所沢市において、このような取り組みがなされたことに対しては、心から応援、協力したいと考えています。一方で、これらの取り組みが学校現場での実践に移行するためには、もう一段も二段も高い壁があることも事実です。このテーマに関心の高い先生方の考えや思いは、毎日児童生徒に向き合う最前線の先生方にどのように伝えたらよいのでしょうか。所沢市教育委員会や各小中学校は、法令で課された努力義務をどのように果たしたらよいのでしょうか。学校を取り巻く時代の変化とともに、児童生徒に最良の教育機会が得られることを願ってやみません。

教育相談研究部

I 研究主題

「児童生徒の生き抜く力を9年間通して育む手法の研究」

II 研究主題について

研究部の発足がちょうどコロナ禍と重なり、ストレスフルな時代の始まりであった。児童生徒は、学校が臨時休業になったり、行事が中止になったり、給食は黙食、マスクをつけたままの一日など、今までにないストレスにさらされていた。

これまで所沢市では、早稲田大学人間科学学術院の協力を得て、数校の小学校・中学校で「こころの教育」を行っていたが、それと並行して教育相談研究部では、小学校低学年から中学校を卒業するまでを通してストレスマネジメントを教えることはできないかという話になった。「小6からだけでなく、低学年から」というところがポイントである。

ストレスを受け止めきれず問題が起こってからストレスマネジメント（ストマネ）を学ぶのではなく、ごく当たり前に小学校入学から「ストマネタイム」に馴染んで育ち、あるときストレスが重く感じ始めたタイミングで「そうだ、自分にはストマネがあった！」と思い出して実行することができるようになることが大切であると考えた。ストレスを受け止めきれなくなる前に、マネジメントができるようになってほしい。重大な結果が起こる前に食い止めたい。こうした思いから、ストレスマネジメントを9年間学び続けることを通して児童生徒の生き抜く力を育み、レジリエンスを高める研究を目指すこととした。そして、そのためには何をしたらいいのかというを考え、この主題を設定した。

III 研究の内容と方法

1 研究の方向性

小学校低学年から、中学3年生まで、その発達段階に応じたストレスマネジメントのプログラムを作成し、実施する。事前と事後にアンケートを行い、児童生徒の変容を見る。当初は学年別のプログラムを作成する案も出たが、早稲田大学人間科学学術院の嶋田教授の御助言もあり、小学校低学年（1～3年生）、高学年（4～6年生）、中学生、の3種類のプログラムを作成することとなった。

2 研究方法

プログラムの実施により、児童生徒のストレスに対する認知を変え、ストレスマネジメントの手法が理解できるように、対象となる学年に分かりやすい内容や言葉遣いで指導案を作成した。ストレスマネジメントを学ぶに当たり、「対人関係」で児童生徒が一番必要としているのは何か、ということの研究部で話し合い、「コミュニケーションの取り方」、その中でも「伝え方」が今一番必要とされるスキルであると仮定した。「言いたいことを上手く伝える」ことをテーマに、1つ目のプログラムを作成した。次に、「上手な聞き方、答え方」をテーマに2つ目のプログラムを作成した。

IV 実践事例

No	ストマネプログラム名	対象学年	実施学校・学年	指導者	実施時期
1	言いたいことを上手く伝えてみよう	低学年	清進小2年	山口教諭	R3.2
			南小3年	阿部教諭	R3.6

		高学年	南小 5 年	阿部教諭	R3. 3
			北秋津小 6 年	柳田教諭	R3. 7
2	うまく仲間に入ろう 	低学年	清進小 2 年	山口教諭	R3. 11
			北小 2 年	加藤教諭	R4. 6
		高学年	北小 5 年	山岸教諭	R3. 11
			南小 5 年	阿部教諭	R4. 7
3	アサーショントレーニング 	中学校	南陵中 2 年	長戸教諭	R3. 2
			美原中 1 年	嶋教諭	R3. 11
			向陽中 3 年	新井教諭	R3. 11
			安松中 2 年	大島教諭	R4. 6
4	ストレスマネジメント	中学校	南陵中 1 年	長戸教諭	R4. 9
			安松中 2 年	大島教諭ほか	R4. 11

V 成果と課題

1 研究の成果

小学校低学年では「同じ出来事に対しても違った考え方をすることによって感じる気持ちが変わること」「友だちとの会話に入りたいときにどう話しかければよいかという型」を学んだことによって、アンケートで「お友だちと上手に話ができそう」と答える児童が 21 名から 25 名に増えた。また小学校高学年では「同じ状況におかれても感じ方は人それぞれ違うこと」

「自分も OK 相手も OK の法則で言いたいことを上手く伝える方法」「会話を弾ませるコツ」を学ぶことで、アンケートの「あなたは自分の気持ちを相手に伝えられますか？」という質問に対し、「ややそう思う」「とてもそう思う」と答えた児童が 22 名から 29 名に増えた。中学校においては、「自分がどのようなときにストレスを感じているのかが分かった」「アサーティブな言い方が分かった」など、知識として吸収すると同時に、自分はどのタイプだろうと客観的に考えたり、自分なりの言い方を考えたりする様子が見られた。小学校から中学校までの 9 年間を通し、同じことを形を変えながら繰り返し伝え続けていくことができれば、レジリエンスを高め、ストレスマネジメントを実現できると考える。

2 今後の課題

研究員としての活動は終わりになるが、今後は、ストレスマネジメントを身近なものとして学校生活の中に取り入れ、学級経営に役立ててもらえるように、市内の教職員に働き掛けたい。そのために研究員自らも実践を重ね、押さえておきたいポイントを明確にする、各教科の指導においても児童生徒につけさせたいレジリエンス力を意識するなど、プログラムの改善を図っていけるといいと思う。研究員として学んだことを生かし、この先関わる児童生徒やその保護者にも積極的にストレスマネジメントを広めていきたい。

VI 参考文献

「人間関係スキルアップワークシートストレスマネジメント教育で不登校生徒も変わった」

2010 年 嶋田洋徳・坂井秀敏・菅野純・山崎茂雄 著 学事出版

「イラストでわかる子どもの認知行動療法 困ったときの解決スキル 36」

2018 年 石川信一 著 合同出版

令和4年度 教育相談研究部 別冊資料

～児童生徒の生き抜く力を

9年間を通して育む手法の研究～

ストレスマネジメント

「ストレスとうまくつきあう」
コミュニケーション編

